九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

龔自珍における詩の原理

竹村，則行
九州大学大学院修士課程

https://doi.org/10.15017/9798

出版情報：中国文学論集. 5, pp.33-46, 1976-03-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

龔自珍における詩の原理

竹村則行

一

龔自珍（一七九二―一八四一）の声名は、すでに彼の在世中から知人の間で一種異常な熱狂を以てとどろきわたっていた。一八三九年己亥、その五十年の生涯から言えば既に晩年にもあたる四八才の彼は、長年つとめた北京での下級官吏生活を退き、故郷の杭州に新天地を開拓すべく二カ月半に及ぶ大旅行を行なったが、その途次、故郷に程近い江南の景勝地揚州に立寄ったところ、彼の名声を慕って彼に面会を申し込む地方の名士が、ドッと押しかけてきたという。

館に帰るや、郡の士、皆、余の至るを知り、則ち大いに讙こぶ。経義を以て質難さんことを請う者有り。史事を発きて問を見す者有り。京師の近事を就詢ぬる者有り。所業の文の若き、詩の若き、筆の若き、長短言（詞）の若き、雑著の若き、叢書の若きを呈し、序を為し、題辞を為さんことを乞う者有り。其の先世の事行を状べ、銘を為さんことを乞う者有り。冊子に書し、扇に書せんことを求むる者有り。……（己亥六月重過揚州記）

この文で注目されることは、郷里の名士が彼を経史の学から長短言（詞）に及ぶ文学の広範なジャンルに通暁した文人として遇していたことである。

また、彼が旅立ちにあたって詠んだ留別の歌は、長途の果てにやっと杭州の生家に旅装を解いた彼よりもずっと早くかの地に着き、すでにそこで人々に口誦されていたという。

家に到るの日、早に予の出都留別の詩を伝誦する者有り。時に、詩先んじ人到るの謡有り。（己亥雑詩自注）

龔自珍が自ら書き誌したこの二例からもわかるように、彼の声名は、その晩年において既に天下に鳴り響いていたのだが、そのボルテージを一段と高めたのは彼の五十才の急死にまつわる、まことしやかな街の雀たちの噂話であった。龔自珍に愛妾顧太清を寝取られた満人官僚絵貝勒が、ひそかに人をつかわして龔自珍を毒殺させたものであるという。この艶話の真偽は今日ではすでに不明であるが、遠慮なく尾ひれの付けられた話が、名士のスキャンダルをこよなくよろこぶ巷間に広く伝えら

れただろうことは間違いない。一九〇〇年代初頭にあらわれた流行新聞小説『孽海花』には、この龔自珍と顧太清とのスキャンダル、および、龔自珍の長子龔橙（かの円明園の焼打ちをそそのかしたと言われる）が父の詩文をみだりに改竄したいきさつなどが、かなりのスペースを割いて念入りに語られている（第三回）。

その龔自珍について、改革派文人の梁啓超（一八七三―一九二九）はいう。

段玉裁の外孫龔自珍は、既に訓詁の学を段に受け、而も今文（公羊学）を好み、経を説くに荘（存与）・劉（逢禄）を宗とす。自珍は、性、詄宕にして、細行を検しまざること、頗るフランスのルソーに似たり。喜んで要眇の思を為し、其の文辞は瑰詭連犿として、当時の人は善しとせず、而るに自珍、益す此を以て自ら憙び、往往、公羊の義を引きて、時政を譏切り、専制を詆排る。晩歳、亦た仏学を眈み、好んで名理を談ず。自珍の学ぶ所を綜ぶるに、病は深入せざるに在り、所有思想は、僅かに其の緒を引くのみにて止まり、又、瑰麗の辞の掩う所と為りて、意は豁達ならず。然りと雖も、晩清思想の解放に、自珍は確かに与って功有り。光緒間の所謂新学家は、大率の人人、皆、龔氏を崇拝する一時期を経過せり。初めて『定庵文集』を読むに、電を受くるが如く然りなるも、稍く進めば、乃ち其の淺薄を厭う。然れども、今文学派の開拓は、実に龔氏よりす。

（清代学術概論）

梁啓超は龔自珍に対し、「深遠なる思索をこのみ、その文章は異様にしてとらえどころがなく、当時の人びとはこれに好感をもたなかった」「龔自珍の学問を綜合すると、その欠点は、研究を深めなかったことにある。あらゆる思想は、ただその端緒についたに止まり、また華麗なる文辞にかくされて、思想が自由に展開されていない」[1]などと辛らつな評を下す一方、清末今文学（その中心は公羊学）の推進者としては龔自珍を十二分に評価し、「初めて彼の『定庵文集』を読んだときは、電に触れたように体がピリピリした」と、自分と龔自珍との感激の出会いを述懐する。

また、改革派梁啓超とは政治的に正反対の立場にあった保守派官僚の張之洞（一八三七―一九〇九）でさえも

二十年来、都下、経学は公羊を講り、文章は龔定庵を講り、経済は王安石を講る。皆、余の出都以後の風気なり。遂に今日有るは傷ましき哉。[2]

と述べ、都北京において龔自珍―王安石という「天命不足畏」、すなわち天命をないがしろにする不逞の輩に、都人士女がこぞって熱狂しているさまを苦々しげに慨嘆する。[3]苦虫を噛みつぶしたような張之洞の顔が浮かんでくるが、このことから逆に、龔自珍が都下に鳴った事実が裏付けられる。つまり龔自珍は、張之洞や梁啓超という政治上の敵味方いずれにとっても、すでに無視することのできない巨大な存在として意識されていたわけである。[4]龔自珍が同時代あるいは後世に与えた影響のうちで、この外に見落してならないのは、かの〝今宋江〟劉亜子（一八八七―一九五八）をリーダーとする詩人結社、南社の文人への夥しい影響であり、さらには黄遵憲（一八六七―一九〇五）に代表される新民派詩人への影響であるが、そのことは倉田貞義『中

国近代詩の研究』（大修館、昭和四四年）に詳しく述べる所であり、ここでは再述しない。

さて、龔自珍が天下に鳴ったのは、決してありうべき士大夫（君子）としてだけではない。『孽海花』のエピソードに象徴されるように、また梁啓超の辛らつな龔自珍評にも示されるように、世人の龔自珍評には、この外に龔自珍をありうべからざる士大夫（狂人）としてみる意識が多分に混入していた。

「狂」とは「正」の反対である。自ら「正」にあると信ずる人が、己れのカテゴリー外の人を指し、「狂人」というレッテルをはる。自分が正人であれば相手は狂人である。かの魯迅の「狂人日記」は自らを「狂」の立場に置いた異端の書であった。この時、「正」とは伝統上の儒教観念であっただろう。儒教が実は人を食う態のものであることを、この「狂人」は執拗にうったえる。

龔自珍の場合はどうか。彼もまた世人から「狂人」と見なされ、そのために自らもたびたび故意に「狂」の擬態をよそおったのであるが、この「狂人」という評価は、あくまでも第三者である世人からみた龔自珍評価である。魯迅の「狂人」が実は「正人」であるように、龔自珍の「狂人」も実は「正人」であるはずである。そこで見方を変えて、龔自珍自身の意識構造は果してどうであったかを知ろうとすれば、その方法は彼が書き残した詩文をたんねんに読むことしかない。私は今日残された彼の詩文を新たに読み直してみた結果、そこには当然ながら一人の感受性鋭き詩人はいても、世のいわゆる「狂人」はいないことに気付いた。むしろ龔自珍は、「狂人」であることも含めて詩人であったのである。本稿では、その龔自珍が詩を生み出してゆく根源のエネルギーは一体どの辺にあったのかについて考察を進める。

二

『説文解字注』の著者段玉裁（一七三五―一八一五）は龔自珍の外祖父にあたる。十二才になった龔自珍は親しく段玉裁から『説文』の手ほどきを受け、これが生涯の彼の経史小学の基礎となった（己亥雑詩自注）。段玉裁は恵棟（一六九七―一七五八）戴震（一七二三―一七七七）王念孫（一七四四―一八三二）王引之（一七六六―一八三四）父子らと共に清朝考証学の最盛期を代表する学者であり、その彼が率先して愛孫にみずからの蘊蓄を傾けたことは、相手側の龔自珍が受けた影響としては、はなはだ大きいものがあった。また王引之は、一八一八（嘉慶二三）年、二七才の龔自珍が浙江郷試に合格した時の座主（主任試験官）であり、龔自珍は、後に師の王引之のために、ねんごろに墓表銘を書く（工部尚書高郵王文簡公墓表銘）。さらには父の龔麗正は、一七九六（嘉慶一）年、ちょうど白蓮教の乱が起きた年の進士であり、龔自珍の経学はこの父からも多分に直接に仕込まれただろう。これらの龔自珍を取り巻く清朝の学術雰囲気の中で、龔自珍は当然ながら考証学者として多方面にわたる考証研究をすすめることになる。

親友の魏源（一七九四―一八五六）は、龔自珍の学問を総括して言う。

君、名は自珍、更の名は鞏祚、字は璱人、浙の仁和の人なり。経に於ては公羊春秋に通じ、史に於ては西北の輿地に

長ず。其の書は六書小学を以て入門と為し、周秦の諸子、吉金・楽石を以て厓郭と為し、朝掌・国故・世情・民隠を以て質幹と為す。晩（年）には尤も西方の書（仏教）を好み、自ら謂う、深微に造れりと。（定盦文録序）

龔自珍が、経史小学は言うまでもなく、晩年には仏教に至るまで、あまねく諸書を渉猟し、かつ考証を行なったことは、前述の梁啓超の謂と同じである。

次に、これを本人の言を借りて言おう。龔自珍が自身の学問について述べた文は次の二つがある。その一は「己亥雑詩」の自注である。「己亥雑詩」は、晩年四八才の彼が、北京から杭州へ里帰りをした途次に詠んだ一連の自伝的叙事詩である。その中で彼は、若い頃の自分が次々に種々の学問に接し得た思い出を回想しているが、詩に付した自注を参考しつつ今それを整理すると次のようになる。

雑詩番号	西暦	嘉慶年令	内容
四七	一八一二	一七	武英殿に職を得、校讐之学（校勘学）の始
五四	一七九九	四	『登科録』を読み、二百年来の科名掌故を搜輯する始
五五		八	天地東西南北之学（地理学）の始
五八	一八〇三	八	段玉裁に『説文』をおそわり、説文学の始
五九	一八一九	二四	公羊学者劉逢禄と出会い、公羊学の始
六四	一八〇五	一〇	古今の官制を研究しはじめる
六七	一八〇七	一二	『四庫提要』を読み、目録学の始
七一	一八〇八	一三	石鼓文を見、金石学の始

若年の龔自珍が興味にまかせ、あるいは周囲の刺激に促され次々に学問に目覚めてゆく過程が、この表によって明らかにされる。ここで龔自珍が言及する校勘学、地理学、説文学、公羊学、目録学、金石学らの学問は、いずれも清朝考証学という一種の科学的研究法を確立することによって目ざましい発展を遂げた学問分野であった。

龔自珍が自分の学問について述べたその二は、一八二二（道光二）年、彼が三一才の時に作った「城南席上の謡」（一名、十客を嘲ける謡、一名、聒聒の謡）と題するパロディ詩である。

一客は古文を談る、夢に倉頡の籀史を享くるを見る。一客は山川を談る、掌紋は西流して弱水と作る。一客は高孤を談る、神明は悒悒として孤矢を念い、泰西の深瞳は一に何に似たる？　一客は宗彝を談る、路に破銅に逢えば雙眥を拭い、邱を発く中郎は倘として封弇す。一客は遺佚を談る、日に十銭を挾みて西市に入り、五銭は麦糊、五銭は紙、年年、東のかた日本に使するを望む。一客は讐書を談る、蝨の胫の偏旁、大いに排比べり。一客は詁訓を談る、夜なに浚長（許慎）を祠り、顔子（回）を配するも、字を識るは憂悩の始まりなるを信らず。一客は虫魚を談る、草間に蛙を聞き、臥して耳を帖る。一客は掌故を談る、康熙の老兵は僂しみて俟つ。一客は公羊を談る、端門に血書又た飛べり。

現代の学者王佩諍によれば、ここに登場する十客、すなわち古文家・西北地理家・算学家・金石家・輯佚家・校勘家・説文家・動物学家・掌故家・公羊家のそれぞれについて、今は佚し

た原注では各々の姓名が累累と書き連ねられていたというが、[6]私は、この十客とは、とどのつまりは龔自珍の学問における十様の分身を示したものにほかならないと考える。その根拠は次の四証である。(1)古文家・西北地理家・算学家・金石家・輯佚家・校勘家・説文家・動物学家・掌故家・公羊家という十客は、前述の魏源の龔自珍評(定盦文録序)や龔自珍の「己亥雑詩」に述べられる学問の内容とピタリ一致するものであり、考証学者龔自珍が考証研究をおしすすめた広範な学問のジャンルを示すものであること。(2)遺佚(輯佚)家について、「年年東のかた日本に使するを望む」といっているのは、龔自珍が日本船に托して、『皇侃論語義疏』『山井鼎七経孟子攷文』のほかに今も日本に残るであろう中国の佚書を求めた「番舶に与えて日本の佚書を求むる書」[7]を指すと思われること。(3)詁訓(説文)家について、「字を識るは憂悩の始まりなるを信らず」といっているが、龔自珍自身も、その詩作のいたる所でこのテーマを繰り返し述べており、文字(説文学)への深い疑念は彼の普遍的なテーマであったこと(後述)。(4)公羊学について、「端門に血書又た飛べり」[8]といっているが、龔自珍は、一九一九(嘉慶二四)年、二八才の時に公羊学者劉逢禄(一七七六―一八二九)と出会って以来、魏源と並んで清末思想界における熱烈な公羊学の推進者となったこと。

このように龔自珍の学問は、段玉裁をリーダーとする清朝考証学の強い影響の下で多方面にわたった。ところでその段玉裁は、この才気あふれる外孫の将来に大いに希望を托し、一八一四(嘉慶一九)年、二三才の龔自珍があるべき明君良臣の姿を主張した政論「明良論」には、八十の老体に鞭打ってわざわざ付評を寄せ

> 耄いたるも、猶ほ此の才を見て死す、吾、恨みず矣。(明良論付評)

と、その才を絶讃する(皮肉なことには、段玉裁はこの翌年に八一才の天寿を全うした)。

さらに段玉裁は龔自珍の詞集「懐人館詞」にも序文を書き、愛孫が詞(長短句)などという「性情」を害なうものから早く足を洗い、自分の後を継いで経史学の道に邁進してほしいと、いささかの老婆心をおこす。

> 仁和の龔自珍は、余の女の子なり。嘉慶壬申(一八一二)、其の父、京師より新安に出守し、自珍は余に呉中に見ゆ。年才かに弱冠なり。余は其の所業を索観るに、詩文甚だ夥く、間ま経史を治むる作有り。風と発り、雲と逝き、一世すべからざる概有り。尤も喜んで長短句(詞)を為す。其れ「懐人館詞」と曰う者三巻、其れ「紅禅詞」と曰う者又二巻、造意造言は幾んど韓(愈)李(白)の文章に於けるが如く、銀盌に雪を盛り、明月に鷺を蔵し、中に異境有り。此の事、東塗西抹する者は多きも、此に到る者は尠し。自珍は弱冠を以て之を能くすれば、則ち、其の才の絶異なると其の性情の沈逸なるは、居ながらにして知るべし。余、少き時に詞を為るを慕うも、詞は自珍の工なるに逮ばず。先君子は之を誨して曰く、「是れ経史を治むる性情に害有り。之を為ること愈よ工なれば、道を去ること且つ愈よ遠し」と。余、謹しんで教えを受け、輟めて一行も為る勿

し。（段玉裁『経韻楼集』巻九　懐人館詞序）（傍点は引用者）

ここで段玉裁は、「経史を治める性情」と「長短句を為る性情」とを全く相容れないものとしてとらえる。「自分（玉裁）もかつて詞作にあこがれ、亡父に教え誨されたことがある」といって自分の若き日の教訓を引用しつつ、経史学をなおざりにしてひたすら詞作に情熱を傾ける龔自珍に向かい、人生の師として、祖父として、また経学の先輩として、やんわりと、しかも毅然とした態度で詞から経史学への転換をせまるのである。

次いで翌年一八一三（嘉慶十八）年には段玉裁は「外孫龔自珍に与える札（てがみ）」を書き、龔自珍が名士となることをキッパリとあきらめ、経史の学に精進して一刻も早く名儒名臣になるようにと叱咤激励する。

萬季埜は方霊皋を戒めて曰く、「無益の書を読む勿かれ、無用の文を作る勿かれ」と。嗚呼！　之に尽きたり！博聞・強記・多識・蓄徳して努力して名儒と為れ、名臣と為れ。名士と為らんと願う勿かれ。何をか有用の書と謂わん？　経史是れなり。（同上）

ここには、あくまで名臣であり、名儒であらんと欲した段玉裁の本領が如何なく発揮されている。

思うに、段玉裁のいう「経史を治める性情」とは、いいかえれば「学者の性情」であるし、「長短句を為る性情」とは、いいかえれば「詩人の性情」である。そして、経学者段玉裁の「学者の性情」は、「詩人の性情」を抹殺し犠牲にすることと引換えに、その代償として得たものである。「是れ（詞作）は経史を治むる性情に害有り、之（詞）を為ること愈よ工なれば、道を去ること且つ愈よ遠し」とはまさしくそのことを指す。これに対し、龔自珍の場合はやや事情を異にする。彼は段玉裁のように「詩人の性情」を抹殺することによって学者になろうとは思わない。いや、むしろ龔自珍は抹殺してしまうには「詩人の性情」があまりにも多すぎ、どうにも手のほどこしようがなかったのである。そこで龔自珍は、経学の大業にひたすら邁進してほしいと願う段玉裁の期待とは裏腹に、ひたすら詞作にのめり込んでゆくことになる。つまり、結果として段玉裁の忠告にそむき、「名臣」や「名儒」の道に背を向け、「名士」の道を志向したのであった。

そういう意味で、段玉裁が龔自珍に書き送ったこの文（懐人館詞序および与外孫龔自珍札）は、「詩人」龔自珍と「学者」段玉裁との意識の断絶を如実に示す格好の資料となる。

三

龔自珍は、生来、人並すぐれて豊かな感受性を有する詩人であった。一七九六（嘉慶一）年、進士となった父が北京へ赴任した時、龔自珍は、まだ幼少五才であった。やがて一家は杭州を引きはらい、父の任地の関係で北京に移り住むようになるが、この頃、少年龔自珍は自分が、わけもわからないある異常な感覚の発作にしばしば襲われることに気付きはじめる。一八二一（道光一）年、三十才の時に作った「冬日小（すこ）しく病み、家に寄する書を作る」と題する詩にいう。

黄日半窗煖　　黄日は窓に半ばして煖かく
人聲四面希　　人声は四面に希（まれ）なり

錫簫咽窮巷　　錫簫は窮巷に咽び
沈沈止復吹　　沈沈として止み復た吹く
小時聞此聲　　小時に此の声を聞けば
心神輒爲癡　　心神は輒ち癡と為る
慈母知我病　　慈母は我が病めるを知り
手以棉覆之　　手ずから棉を以て之を覆う
夜夢猶呻寒　　夜夢みて猶ほ寒さに呻けば
投於母中懐　　母の中懐に投ず
行年迨壯盛　　行年は壯盛に迨ぶも
此病恆相隨　　此の病は恒に相随がう
飲我慈母恩　　我が慈母の恩を飲むは
雖壯同兒時　　壯なりと雖も児時に同じ

人の話し声もほとんどしない閑散とした下町の一室で、私はひとり病気で寝ている。窓には昼下がりの日が照りつけ、その一角だけは冬にしては奇妙なほど暖かそうである。目をとじ、じっと瞑想にふけっている私の耳に、ふと物売りのチャルメラの音が聞えてきた。その音は細く長く咽ぶように断続しながら下町を漂よい続ける。それで思い出したが、私は小さい頃、このチャルメラの音色を聞くと、いつも心がぽかんとしてしまったものだ。そんな時、母は私が放心しているのを知り、いつもやさしく掛けぶとんをかけてくださった。夜に夢をみてうなされどうしても眠れない時は、よく隣に寝ている母のふとんにもぐり込んでいったっけ。今年、私はすでに齢三十を越えたが、チャルメラの音色に放心するクセはいっこう直らぬ。いやそればかりか、いやましに強まりさえする。母さんにあまえる気持は、三十になっても、子供のときとちっとも変わらないなあ。……

幼少時から壮年に至るまで一貫して止まず、チャルメラの音を聞いただけでたちまち我を忘れて放心状態におちいる龔自珍の感受性の鋭さは、彼が本質的な意味で詩人であることを十分に証明する。この放心状態は、幼少期における龔自珍の詩的感情の発露を示すものである。

彼はその詩作のいたるところで、自分の有する豊富な感情の処理にほとほと手をやいていることを一種の悲哀感を込めてうたいあげる。

情多く處處に悲歓有り、
何ぞ必ずしも滄桑は、始めより浩いに歎かんや。(9)（雑詩）

彼の多情は、いたるところで感情と現実との大幅な齟齬を来たし、彼は滄桑（世の中の激しい移り変わり）以前に、自身の内ですでに早くも哀歓を感じてしまうのである。

その哀楽の感情が通常の人の何層倍も豊富であったことは次のようにうたう。

之の美しき一人、楽亦た人に過ぐれば、哀亦た人に過ぐ。(10)
（琴歌）

「之の美しき一人」とは、すなわち龔自珍自身を指す。同じテーマは、彼の自伝とおぼしき詩作品「寒月吟」の中でも歌われる。

我が生は、之を天に受く、
哀楽恒に人に過ぐ。(11)

さらに、晩年に詠んだ一連の自伝的作品「己亥雑詩」において

少年の哀楽は人に過ぎたり、
歌泣は端無く、字字真なり。[11]

とうたうのも全く同じ意味あいであり、もう五十に手のとどく頃になっても少年の頃から続く放肆な感情にほとほと手を焼くさまが、くどくどしくも述べられる。

このほか

猛りに憶う、児時の心力の異しきを。[12]（猛憶）
我が少年に当りし時、盛気の何ぞ跋扈せる。[13]（蘭汀郎中の園居に題す）

というモチーフも同じく自己の豊かな感情をうたうものである。

さて、龔自珍にとって経史小学、とりわけ段玉裁の指導になる説文学とは、彼のほしいままなる感情に一種のたがをはめるべきものとしてあった。「実事求是」をモットーとする清朝考証学は、それがテキストクリティクを主体とする一種の科学研究であるゆえに、主観的感情の入り込む余地は最小限にせばめられる。自由な魂は束縛をきらう。放肆な龔自珍の感情は、当然、経学（説文学）というたがとは質的に相容れない部分があった。先に述べたように段玉裁の「経学にはげむように」という忠告にもかかわらず、その後の彼が逆に死ぬまで詩作に没頭していったことからも、それはわかる。

龔自珍は、学者の家系に生長したにもかかわらず、経学の一環としてある文字学に対し決して全幅の信頼はおかず、一種の懐疑心、ほとんど本能といってもいいほどの反発心をその意識の根底に蔵している。先述の「東南席上謡」において、「説文家」を「文字を識るは憂悩の始まりなるを信らず」と皮肉っていることは、彼が説文学に対して抱いていた懐悩心のあらわれであるだろう。以後は一切詩はつくるまいと誓って

我に第一の諦有り、文字の中に落ちざること。[14]（戒詩）

と発心するのは、文字の持つ魔力にとりこにされまいとする龔自珍のはかない抵抗を示すものである（詩作とは文字の魔力にとりつかれた所業であるが故に、戒詩によって、それから逃れようとする）。さらに、

危うき哉、昔は幾んど敗れ、万仞も無垠に堕ちんとす、
憂患有るを知らずして、文字は其の身に樊えり。[15]

とうたうのは、かつて彼が文字の持つ憂患という属性に気付かぬまま、やみくもに文字学へ突進しようとしたことを一種のおぞましさを以て回顧するものである。

龔自珍が経学に対して持つ根底からの疑問を、以上にあげたような詩ばかりでなく、このほかに、彼の文章から求めようとすれば、(1)龔自珍は、王引之・顧広圻・李鋭・江藩・陳奐・劉逢禄・荘綬甲らの同時代の諸学者とちがい、「百家」「雑家」の言を好み、また「天地東西南北の学」に忙殺されて、生涯ついに易・書・詩・春秋という経学者の経典を写定することがなかったこと（古史鉤沈論三）、(2)江藩（字は子屏）の著した『国朝漢学師承記』に対し、公羊学者の立場から鋭い質問を投げかけていること（江子屏所著書序、与江子屏牋）など、数多くあげられる。

そして、ここに指摘した龔自珍の生来の多情と、説文学、さらには経学に対する根底からの疑念との乖離現象は、実は龔自珍の意識裡において、うかつに見すごしにできぬ重要な意味あいを持つのである。すなわち、彼は一生のあいだ己が持つ奔放

な性情とそれにわくをはめるべき説文学（経学）との狭間に悩まされ続けた。言葉をかえていえば、龔自珍の詩作は内発のものであり、龔自珍の経学は外発のものであって、彼は内発のもの（詩作）と外発のもの（経学）の軋轢に一生苦しんだのである。もし彼が当時の学界の大勢を占めていたいわゆる通儒であったのなら、彼は「名臣」となり、「名儒」を志し、学問に没頭することに己れの生きがいを見出していただろう。それはそれで、経学者としての龔自珍の名声を何ら傷つけるものではない。しかし、彼は通儒たるには「詩人の性情」がやや勝っていた。段玉裁のたびたびの忠告は、彼を経学者に育てあげようとしてのことであった。しかし、その後の彼が、経学研究もさることながら事実上は祖父の忠告にそむき、詞集を刊行したりして詩作をやめず、ひたすら詩人の道を歩み、そのスキャンダルが都人士女の口にのぼせられるまでに「名士」の道を志向したのは、彼が究極において己れの有する生来の感情に忠実であったことに拠る。

そして、この現象をさらに大きく歴史の流れからとらえるならば、龔自珍が経学の持つ非人間性に疑問を持ち、己が性情にあくまでも忠実に詩人の道を歩もうとしたところこそ、近代の中国がアヘン戦争―太平天国の乱―日清戦争―辛亥革命―五四運動という歴史事件を経て、封建制のしがらみを脱し、個我の解放を叫んで目覚めゆく過程と質的に一致したのであり、近代現代の龔自珍研究者が、ひとしく彼を中国近代の先駆者として位置づける理由も、またそこにあるのである。(注)

四

龔自珍における詩作のモチーフを探ろうとするとき、彼が、自らの感情の根底に存在するドロドロしたものに、あえて正面からメスをふるおうとした次の三篇の論文は我々に実に大きな示唆を与えてくれる。すなわち「宥情」（『定盦続集』所収）・「長短言自序」（『定盦続集』所収）・「写神思銘」（『定盦文集』所収）がそれである。この三篇の論文は、いずれも制作年代が明記されていない。ただ「写神思銘」は『定盦文集』の冒頭を飾る論文であるから編者がこれを高く評価していたことがうかがえるし、「宥情」から「長短言自序」までには十五年間の時間の隔たりがあることは「長短言自序」中の句によってわかる。(18) 今仮りに、王佩諍『龔自珍全集』の配列にそって、(1)宥情、(2)長短言自序、(3)写神思銘の順に吟味してゆくことにする。

(1) 情を宥す

龔子（自珍）間居するに、陰気沈沈として心に来襲し、何の病なるかを知らず、以て江沅（？―？）に謫う。江沅曰く、「我も嘗に間居するに、陰気沈沈として心に来襲し、何の病なるかを知らず」と。龔子、則ち自ら病を其の心に求む。心に脈有り、脈有れば童年を見、童年に母の側に侍るを見、母を見、一燈熒然たるを見、一硯一几を見、一僕嫗を見、一猫を見、見ること是の如くして己を見れば、而わち吾が病得れり。……龔子、又た内に自ら鞫めり、状や何如？曰く、予、童たりし時、塾より逃れて母に就きし時、一燈熒然として一硯一几ありし時、一嫗に依りて一猫

を抱きし時、一切の境未だ起らざる時、一切の哀楽未だ中ばならざる時、一切の語言未だ造らざる時、彼の時に当たりて、亦た嘗に陰気沈沈として心に来襲す。

題するところの「情」とは、龔自珍に関係の深い許慎（三〇―一二四）『説文解字』の言を借りれば、〝人の陰気の欲有る者〟のことであり、そのことは、彼自らも、引用文では省略した本文の前段においてこれを明記するところである。「宥す」とは、ゆるめる意であり、龔自珍が己が内にひんぴんと起り来る「陰気」の仕末にほとほと手を焼いたあげく、窮余の一策として放任主義をとり、「陰気」をあるがままにすておくことを意味する。では、ここにたびたび述べられる「陰気」とは一体何であろうか。龔自珍にいわせれば、それは、彼が「閒居」しているとき、心の内にある種の脈動を感じて起り来るものであるという。このように、いともたやすく「発病」する形態は、実は、先に述べた「冬日小病寄家書作」詩中にいう、チャルメラの音色に茫然として我を忘れた少年の日の龔自珍と全く同じものである。それゆえ私は、この〝陰気の発病〟とは、やはり龔自珍における詩的感情の発露であると見る。ここでは、龔自珍が、彼特有のどうしようもなく欝結した感情（すなわち陰気）に実に頻繁に取りつかれる状が述べられる。彼はどのようにして発病するか。まず、わけもないのに心内に微妙な脈動を感じる。そして、その心の揺れが核となり、次いで童年や母や灯、硯几などの日常身近に接する茶飯事の記憶をつぎつぎに呼び起こしてゆく。この時、彼は夢中にある。次々に夢想をめぐらした後、ふと自分をふりかえれば、自分はすでに陰気のとりこになっている。この「陰気」こそは、彼の一切の行動を規制する暗黒の情念（パートス）だといっていい。その意味で、彼は本質的に詩人であった。

(2) 長短言自序

情の物たるや、亦た嘗に之を鋤かんことに意有り、之を鋤くも能わざれば、而わち反って之を宥す、之を宥すも已まざれば、而わち反って之を尊ぶ。龔子（自珍）の長短言（詞）を為るは何すれぞ？　其れ殆んど情を尊ぶ者か？　情は孰れをか尊と為す？　住すること無きを尊と為す、寄すること無きを尊と為す、境無くして境有るを尊と為す、指無くして指有るを尊と無す、哀楽無くして哀楽有るを尊と為す。情は孰れをか暢と為す？　声音に暢ぶ、声音は如何？　消瞀以て之を終る、之れ其れ消瞀以て之を終るを如何せん？　曰く、先ず小しく之を咽ぎ、乃ち小しく之を飛ばす、又た大いに之を挫き、乃ち大いに之を飛ばす、始め孤り之に盤り、悶悶として以て之に柔がい、空闊として以て之に縦游す、而わち哀に極まり、哀なれば而わち瞀に極まる、則ち散り畢んぬ。人の間居するや、泊然として以て和み、頑然として以て恩仇無きも、是の声を聞くや、忽然として起ち、楽しむに非ず、怨むに非ず、九天に上り、九淵を下り、将に巫をして之を求めしめんとするも、卒に自ら其の然る所以を喻らず。疇昔の年、凡そ予の求めて声音の妙を為すは、蓋し是の如し、是れ情を尊ぶを欲する者に非ざるや？　且らく惟だ其れ之を尊ぶ、是を以て「宥情」の書一通を為り、且らく惟だ其れ之を宥す。是を以て十五年、之

を鋤かんとするも卒に克わず。請う、之を問わん、是の声音の引く所は如何？　則ち曰く、悲しい哉！　予は豈に自ら知らざらん？　凡そ声音の性は、引きて上る者を道と為し、引きて下る者を非道となす。引きて旦陽に之く者を道と為し、引きて暮夜に之く者を非道となす。道には則ち出離の楽しみ有り、非道には則ち沈淪陥溺の患い有り。住する無きと曰うと雖も、予の住するや太だし、寄する無きと曰うと雖も、予の寄するや将に出でざらんとす。然らば則ち、昔の年、此の長短言を為るは何すれぞ？　今の年、之に序するは又た何すれぞ？　曰く、爰に書するのみ。

ここには、龔自珍の詞（長短言）作の秘訣が説き明かされる。彼にとって詞作とは、つまりは「情を尊ぶ」ものとしてあった。先に「宥情」の篇で述べたように、日々断えず襲いかかって来る憂欝の念（陰気）にどのように対処するかは、龔自珍がいつかは解決しなければならない切実な精神内面の課題であった。憂情がきざし始めると、まず、これを除き去ろうと努める。どんなに除こうとしても除くことができなければ、これを一時あるがままにほったらかしにしてみようとする（宥情）。龔自珍の情は、湧き起こる泉水の如く、いくら解き放っても尽きることがない。そこで彼は情に対する考えをあらため、一転して情を尊ぶようになる次第である。

詞（詩餘）は詩に比べて、その発生からみて音曲に多大のポイントを置き、人間（特に男女）の持つはかない慕情を切切と句に詠み込む作品が多いが、その詞は、また龔自珍の奔放な性情を填める器としても絶好のものであったのである。龔自珍の詞作は、一八一〇（嘉慶一五）年、彼の十九才の時から始まる（己亥雑詩自注）。一八二三年には、詞集として『無著詞』（初名は紅禅詞）『懐人館詞』『影事詞』『小奢摩詞』を刊定しているが、段玉裁の「懐人館詞序」（一八一二年作）には、「其曰懐人館詞者三巻、其曰紅禅詞者又二巻」とあることから、『懐人館詞』『紅禅詞』の二種の詞集は、すでに十年近く前に、彼が詞作を始めて間もなく編まれていたことがわかる。なお、王佩諍が校訂した『龔自珍全集』には、「無著詞四四、「懐人館詞」四四、「影事詞七、「小奢摩詞」十八、「庚子雅詞」三六の計一四九闋を輯録する。

(3)　神思を写す銘

夫れ心霊の香は、蘭・蕙より較に温かく、神明の媚は、裙裾より絶かに嬉わし。殊く呻き窈かに吟じ、魂舒び魄惨めば、殆んど故実を離れ、言語に絶する者有り。鄙人の禀賦は実に沖するも、愁を孕みて竭くる無く、間に投じ乏しきを簪さんとするも、沈沈として楽しまず、豪を抽りて吟うも、其の緒を宣ぶる莫く、枕を欹て内に聴くも、其の情を訟うる莫し。古を懐うと謂うも、會て詩書に朕わらず、物に感ずと謂うも、豈に能く肇蛻に役しまんや、将に楽と謂はんとするや、胡ぞ迭も至りて和せざる、将に哀と謂はんとするや、抑も屢ば襲いて疢むこと無し。徒らに乃ち漫漫、漠漠、幽幽、奇奇として、鏡を覧れば忽ち晞き、顔色変ず。是れ知る、仁義坐忘は、遠くは淵子（顔回）の聖に慚じ、美意延年は、近くは郁生（唐の韋陟）の哲に謝ずることを。告ぐべからず、矧んや療すべけんや。銘を為りて以て

之を写す、銘に曰く、熨むるも舎まず、予を襲いて其れ涼やかなり。咽ぐも復た存し、予に媚びて其れ長なり。神を戒しめ夢みるなからしむるも、神は乃はち自ら動く。黯黯たる長空に、楼疏は万重たり。楼中に鐙有り、人有りて亭亭たり。未だ一言も通ぜざるに、化して春星と為る。其の境は測らざるも、其の神は習う。峨峨たる雲王、清清たる水仙、我れ銘つくりて紘に代うるも、希声は伝わらず、千春万年も。

龔自珍は、自分の意識の内奥にある「神思」についてうたう。ここでいう「神思」とは、表現はちがっても先の「宥情」でいう〝陰気〟や「長短言自序」でいう〝情〟と全く同じものを指していっているのであり、龔自珍の憂い多き心の奇しき働きをいう。「神思」というとき、あるいは彼は、かの『文心雕龍』にいう「神思」（巻六）を十分に意識裡においていたかも知れない。いずれにせよ、文字学に耽った作者のこの作品は、字句こそかなり難解であるが、四字句がきれいに並んだ華麗な駢儷文であり、作者の心の奥底にある「神思」（情、陰気）に強烈なスポットライトを当て、その像をくっきりと浮かびあがらせた古今の名篇である。

以上に掲げた「宥情」「長短言自序」「写神思銘」の三篇の論文は、豊富な感情を具有する龔自珍が己れの精神内部に立ち至って勇猛果敢にメスをふるおうとした、いわば精神解剖の書である。従って龔自珍における詩の原理を考察しようとするとき、この三篇の論文は、これを見すごしにすることはできない。

五

一七九二（乾隆五七）年秋、イギリス国王ジョージ三世の意を受けた特派使節マカートニー卿の一行は、ライオン号に乗ってポーツマス港を出港した。目的は、諸々の制限下にあった従来の対中国（広東）貿易を自由化し、新たにイギリスの中国市場を開拓することにあった。〝朝貢〟の旗を翻翻とひるがえし、乾隆帝八十歳の聖寿をことほぐ名目の下に、はるばる白河を溯り北京に入城し、おりから熱河に避暑していた乾隆帝を、その離宮にまで追いかけた使節団は、しかし遂に所期の目的を達することができなかった。それは、貿易の実利を求めたイギリス側と使節団をあくまで儀礼訪問として遇した清朝側との間に、決定的な意識の乖離をみたからである。この乖離は、いわゆる「三跪九叩頭」の儀礼問題に象徴される。この事件は、十八世紀後半に始まったイギリス産業革命が自国の製品の販路を求めて中国に市場を開拓しようとした結果ひき起こされた事件であり、一方の中国は、その際の乾隆帝の尊大な回答文にいみじくもあらわれているように、伝統的な〝中華思想〟の幻想に酔い痴れるあまり、当今世界に対する冷静な現実認識を欠いたものと思われる。虚偽は常に真実によって打ち破られる。この後の中国はアヘン戦争をはじめとして内憂外患の諸々の辛酸をなめつつ、やがて近代へと目ざめゆくのである。

龔自珍は、この年、一七九二（乾隆五七）年七月五日、浙江の仁和（今の杭州）東城馬坡巷に生まれた。家世は代々の儒家であり、父の龔麗正は「国語注補」「三体図考」「両漢書質疑」「楚

詞名物考」などの著作を残す学者であった。また母の段馴は段玉裁の実の女であって、自らも「緑華吟榭詩草」などの詩集をものした詩人であった。

この、学者と詩人とを父母に持ち、清朝一代の碩儒を外祖父に持つ人的環境下にあって、龔自珍は人並み秀れて豊かな感受性を具有した詩人として生まれた。

父の龔麗正が進士に合格した嘉慶一（一七九六）年は、あたかも白蓮教に共鳴する群衆が、湖北・四川・陝西・河南の諸省を席捲して大乱を起こした年にあたり、前のマカートニー事件を清朝中国にとって外患とすれば、これは清朝中国にとって内憂であったといえる。この頃、龔自珍は江南をあとにして北京に移り住むようになる。進士に登第した父が礼部主事を拝命し、任地に赴いた為である。

異常なほど敏感な龔自珍の感受性は早くもこの頃に初期の発露をみる。昼下がりの下町に咽ぶように漂い流れるチャルメラの音色を耳にした少年の龔自珍は、たちまち忘我の境地におちいり、心もとろけてぼんやりする。それと察した母は、やさしく手ずから少年の寝ているふとんを掛け直してくれた。このたやすく恍惚となる病は、龔自珍が男ざかりの三十才を越えても、息むばかりか、ますます強まって来さえしたのである（冬日小病寄家書作）。

龔自珍は、一八一〇年、十九才の時、始めて声に倚って填詞を作った（己亥雑詩自注）。詞こそは、ほしいままな彼の性情を盛るにぴったりの器だったと見え、その後の彼は、ますます詞作へ傾倒してゆくようになる。一八二三年には、文集三巻、餘集三巻と共に、無著詞（紅禅詞）・懐人館詞・影事詞・小奢摩詞などの詞集を刊行している。

龔自珍のこのような詞作傾向について、彼の外祖父であり、外孫に対しもっぱら小学方面の教授者であった段玉裁は、その詩作に一定の評価を与えつつも、自分の経験を引合いに出し、〝詞は経学に害があり、詞作がうまければいよいよ道から遠ざかるものだ〟として、この外孫に警告を与えている（懐人館詞序）。

ここには、いわゆる「学者の道」と「文人の道」の分岐点が浮きぼりにされる。代々の儒者の家に生まれ、かの段玉裁から親しく「説文」の手ほどきを受けた龔自珍にとって、説文学をはじめとする考証学は、他の多くの学者がそうであるように、いわば外発のものであった。これに対し、尽きることなき強烈な感情を内抱していた彼が詩詞製作へと詩人の道を歩むのは、他の多くの学者とは違って、いわば内発のものであった。

彼を取巻く時代状況は、まさしく末期の様相を呈している。アヘンの害毒は、すでに深く中国人の身心をむしばみ、大量の中国銀の流出現象に清朝官僚（マンダリン）はなす術を知らず、街巷には餓死者が続出した。この暗冥な世相にあって、龔自珍は公羊学のテーゼに拠りつつ〝狂〟の擬態をふりまくことによって、かろうじて己れに忠実であろうとする。ベストセラー小説にスキャンダルの主人公として登場し、自分の息子から位牌を鞭打たれる彼は、世人の「狂人」という評価が根強いものであったことを物語る。しかし龔自珍がつまりは自分の感情に忠実であったことが、歴史の発展段階からこれを言うならば、中国が封建制の桎梏を脱し、多大の犠牲を払いつつ、個我つまり

民族と国家の独立をめざして近代に目ざめゆくことと、その軌跡が本質的に一致したのであり、彼が近代中国の先駆者として評価される所以は、実にここにあるのである。

註

(1) 小野和子訳『清代学術概論』（平凡社東洋文庫二四五）二四二頁。

(2) 『張文襄公全集』巻二二七（詩集四）におさめる「学術」と題する詩の自注。

(3) 張之洞は、自分の政敵として、いみじくも龔自珍と王安石とを並べかかげたが、実は、龔自珍は、その王安石をこの上もなく尊敬し、王安石が宋代にとった新法を、清末の政治状況の中で再現させようとして、苦心さんたんしているのである。すなわち、一八一四（嘉慶一九）年の冬には、龔自珍は王安石の保甲法に基づいた政策を上奏しているし（保甲正名）、一八二九（道光九）年の殿試では、彼は、王安石の「仁宗皇帝に上る書」に則って答案を書いたのである（己亥雑詩自注）。また、「発大心文」（国学扶輪社本『龔定盦全集』）の後記に、張維屏（字南山）を引き、「もし龔自珍が志を得ていたなら、恐らくは王安石のようになっただろう」と言っているのは、けだし、言い得て妙である。

(4) 丸山松幸「異端と正統」（人物中国志2・毎日新聞社）の中の「Ⅶ破局への予感―龔自珍」にも同様の指摘がある。

(5) いちいちは挙げないが、龔自珍の詩詞には、「狂」「狂名」「狂客」などの語が、おびただしく使用される。

(6) 王佩諍校訂になる『龔自珍全集』（中華書局、一九七四）四六六頁。この本の初版は一九五六年である。一九七五年二月には、上海人民出版社から再版されたが、上海人民出版社本では、前言「九州生気恃風雷」及び張祖廉「定盦先生年譜外紀」を新たに付し、中華書局本にあった王佩諍の前言、校印後記、及び龔自珍墨跡の写真はいずれも削除されている。前言「九州生気恃風雷」は、陳旭麓の署名で、「学習与批判」一九七五年二月号に再録する。

(7) 同全集三三〇頁。

(8) 『春秋公羊伝』哀公十四年何休註。

(9) 『龔自珍全集』四四一頁。

(10) 同全集四四六頁。

(11) 同全集四八一頁。

(12) 同全集五二六頁。

(13) 同全集四九五頁。

(14) 同全集五〇二頁。

(15) 同全集四五二頁。

(16) 同全集四八八頁。己亥雑詩第六二首にも「後人識字百憂集」という句が見えており、龔自珍は、ここで確かに、かの蘇東坡の「人生識字憂患始」（石蒼舒醉墨堂）のモチーフを意識していただろう。しかし、蘇東坡の謂は知識人の教養としての「文字」の意であり、ただちに「文字学」を指すのではない。ここでは、経学としての文字学は教養としての文字学に含まれるものとして考えた。田中謙二『龔自珍』（中国詩人選集・岩波書店）近藤光男『清詩選』（漢詩大系二二、集英社）を参照。

(17) 手近な文学史の本をひもといても、侯外廬『中国早期啓蒙思想史』（人民出版社、一九五六）・北大中文系一九五五級『中国文学史』（人民文学出版社一九五八）・同『修訂本』（一九五九）・游国恩等編『中国文学史』（人民文学出版社、一九六四）などの文学史・思想史の一般的啓蒙書は、いずれも龔自珍を資産階級啓蒙時期における文学者として叙述する。また文化大革命を経て〝どのように儒家、法家の斗争史を書くのか〟が新たな課題となった中国において、法家としての龔自珍を高く評価する立場に立って、樊政「龔自珍的尊法反儒精神」（文物、一九七四、十二）・陳旭麓・「九州生気恃風雷」（学習与批判、一九七五、二）・石望江「高吟肺腑走風雷」「朝霞一九七五、七）らの龔自珍専論が陸続と発表されつつあるのはまことに興味深い。日本では相浦杲『現代の中国文学』（NHKブックス一九七二）が〝近代文学の父〟龔自珍から筆を起こしているのは甚だ妥当であるし、著者の慧眼である。

(18) 龔自珍の詩詞に「十五年」という語がたびたび使われるのは、おそらくこのことと関係があろう。